

ご注文は乃木さんちの
園子ですか？

Urasake

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

結城友奈は勇者であるシリーズの作品のキャラがほかの作品にクロスオーバーする作品が全然ないので書き始めました。

ごちうさの世界に乃木園子がシャロと千夜の幼馴染としていたらとして書いています。

キャラの性格口調などを正確に表せていないかもしれませんが。それでもいいよという方が楽しめたら幸いです。

目次

ご注文はうさぎですか？編 1年目

第1羽「新しい住民がこの町にやって

きたんよ」 1

第2羽「お嬢様学校に入学するんだぜ

」 6

ご注文はうさぎですか？編々1年目々

第1羽「新しい住民がこの町にやってきたんよ々」

ここ、木組みの町のベンチで一人ボーとしている少女がいた。

薄茶色の瞳に、特徴的な長い金髪を青いリボンでまとめた少女。

大社の社長の娘、乃木（のぎ）園子（そのこ）だ。

大社とは、世界中の商品を扱って、ビジネスを成功させた世界的に有名な大企業である。

そんな彼女は今年の春にこの辺りのお嬢様学校に入学する。

・乃木園子・

「あ、鳥さんだ々。」

ボーとしていると視界の端にあたりと地図を見比べている少女がいた。

「ここがこうで、あっちがそっちで、うくん…。」

困ってるのかな々？

立ち上がりその少女に話しかける。

「迷ってそうだけ大丈夫々々？」

すると彼女は、

「そうなんだよ、香風さんちに行きたいんだけど分からなくなっちゃて…。」

そこまで困った様子にはみえなかった。

これは話しかけなかつたら適当にその辺を探し始めそうな雰囲気だよ。

「地図見せてもらってもいいかな？」

「うん、いいよ。」

「えつと…そこを曲がって、ここをこう行ったらいけるね。」

おしえると、少女は満面の笑みになる。

「ありがとう。あ、私は保登（ほと）ココアだよ。あなたは？」

「私は乃木園子なんよ。よろしくね〜ココロン。」

少女もといココアは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

「ココロン？私のあだ名か!!じゃあ、園子ちゃんは園ちゃんかどうか？」

「おお〜!その呼び方は2人めなんよ。」

そこでココアはハツとした表情をした。

「私、香風さんち探さなくちゃ!?!またね園ちゃん!!」

「また今度〜。」

ココアと別れ、甘兎庵に向かう。

少し歩き甘兎庵の前につくと、ちょうど甘兎庵の隣のボロ小屋から出てきた少女がこちらに気づく。

「あれ、園子奇遇ね。」

「あ、キツシー、お出かけ〜?」

「少し甘兎庵に行くだけよ。」

「じゃ、一緒にはいるんよ〜。」

・シャロ・

私、桐間（きりま）シャロには2人の幼馴染がいる。

1人はとなりの和菓子などを出してる喫茶店の看板娘の宇治松（うじまつ）千夜（ちや）。

もう1人は社長令嬢の乃木園子。

2人とも少し天然でマイペースな性格だ。

その為、一緒にいるとなかなか手がかかる。

でも、調子に乗るし、恥ずかしいから絶対に本人には言わないが、大切な幼馴染だ。

園子を先頭として甘兎庵に入る。

私の顔を見るなりとびかつかけてくる兎、あんこは園子がいるとそちらで甘えるため、こちらには来ない。

「二人ともいらっしやい。」

甘兎庵の制服を着た千夜が出迎えてくる。

「マツチ、きたんよ〜。」

園子と席に着く。

「ご注文は何にするのかしら?。」

お品書きを見ると、

「私は花の都三つ子の宝石にするよ〜。」

「なら私は千夜月にするわ。」

「じゃあ、ちよと待っててね。」

少しして、

「はい、お待ちどうさま、シヤロちゃんの千夜月ね。」

前に栗ようかんが置かれる。

「で、園子ちゃんの花の都三つ子の宝石ね。」

園子の前にあんみつに団子が刺さっている品が出てきた。

「いただきます。」

「ごちそうさま。」

園子はまだ食べているが、私は席を立ちお会計をすませる。
「それじゃまた。」

別れの挨拶をしたとたん、あんこが飛びかかってきた。
ゆ、油断しすぎた…!!。

「いやー…。」

・乃木園子・

シャロがお店から逃げ出し、あんこもそれを追いかけてお店から出っていく。

「ほんとあんこはキツシーになついでるんよ。」

「シャロちゃんは兎になつかれやいわよね。」

2人はその光景を見てほのぼのするのだった。

第2羽「お嬢様学校に入学するんだぜ〜」

小鳥のさえずりが聞こえる。

チュン チュン

「う〜ん、サンチョがいつぱいなんよ〜。」

ベットの上で体の長い猫の人形『サンチョ』を抱えて園子は幸せそうな顔で寝ている。

すると、突然……!!

ジジジジジジジ

目覚まし時計が鳴り響く。

「わわあああ……。」

園子は飛び起き、急いで目覚ましを止めた。

「もうあさなんや。」

ベットから降り、学校に行く用意を始める。

今日は学校の入学式だ。

期待を胸にサンチョをカバンに入れ、ビューンと外に飛び出した。

・シヤロ・

「園子、ちゃんと起きてきてるかしら？」

園子と学校に行くために自身の家の前に立っていると、甘兎庵から千夜が出てくる。

「おはよう、シャロちゃん。」

「おはよう。」

「園子ちゃんを待っているの？」

「ええ、でも少しちゃんと起きれているか不安なのよね。」

園子はよく寝る子だ。

朝には弱いし、授業中でも寝ている姿を見ることがあるほどである。

まあ、学校まで人形兼枕であるサンチヨを持つてくるのだから寝る気満々に思えるのは私だけではあるまい。

そのようなことを考えていると、

「マツチ、キツシー、おはようなんよ。」

園子がやってきた。

「おはよう、園子ちゃん。」

「おはよう、ほら、学校行くわよ。」

「はい。」

園子と一緒に学校に向けて歩き出す。

「いつてらしゃい。」

「いつてくる(わ)(んよ〜)。」

千夜に返事をしていると、

「あんたたち気を付けていくんだよ。」

千夜のおばあちゃんがお店から顔出した。

「バーヤ、行つてくるんよ〜。」

園子はこのこししながら手を振り、私は軽く挨拶をして、通学路を歩いていく。

・園子・

学校へ向かっていると、離れた場所にこの付近のもう1校の高校の制服を着たココアを見かける。

ココロンなんで制服着てるんだろ？

千夜がその高校に行くため知っているが、その高校の入学式は明日。

つまり、普通今日制服着ているのはおかしいのだ。

などと考えながらじつと見ていると、

「園子、なにみてるの?」

「何でもないんよ〜。」

今はシャロと学校に登校しているため聞きに行けない。

万が一聞きに行くことで時間がかかったら、関係ないシャロが私の私情で学校につくのが遅れるからだ。

うゝ、小説のネタになりそうなのになゝ。

面白そうなため少し悩んだが、周りを眺めながら歩くココアはノータッチと決め何もなつかた様に進んでいく。

学校につき、クラスを確認するとシャロと同じクラスだ。

「園子と同じクラスね。」

「おおゝ、やったぜゝ。」

「はいはい、はしゃがないの。」

シャロが軽くなだめながら一緒にクラスにはいる。

クラスに入り少しすると体育館に移動となった。

・シャロ・

入学式が順当に進んでいく。

そして、

「新入生代表の言葉。乃木園子。」

そう、この学校の今年の首席合格は園子なのだ。

マイペースで天然、授業中でも眠ることがあるため気づかれにくいだが、彼女は天才だ。

軽く学ぶだけで理解し、運動神経も抜群。

それに、園子の特技というのだろうか、彼女は昼寝していても話を聞くことができ、返事も来る。

なので、授業に出ているれば大抵は学べているのだ。

その為、園子が首席だというのも必然であろう。

「暖かな春の訪れと共に、~~~~~。」

園子の代表の言葉が終わり、周りから拍手が送られる。

入学式が終わりクラスに戻ってきた私たちは担任の話を聞き、自己紹介の時間になった。

「初めまして、○○中学校出身の桐間シャロです。好きなものは紅茶です。3年間よろしくお願います。」

私は自身の自己紹介に手ごたえを感じていた。

よし、これならこのお嬢様学校でも通用しそうね。

「乃木さんちの園子だぜ〜。甘兔庵で店員さんやってるんだぜ〜。」

いつもの変わらない園子の姿を見ているときつきまで感じていた緊張が解けた。

ふふ、園子は相変わらずね。

学校は午前中までに終わり、帰り始める。

園子は先生が用事があるとのことで後から追いつくらしい。

その為、1人で帰っていると、帰り道に野良ウサギが現れた。

不良野良ウサギー!?! 噛まれる! 怖い! 通れない!

恐怖で動けないでいると、

「あーまた通行のジャマしているな、ほらしっしつ。」

同じ制服を着た人が追い払ってくれる。

「大丈夫だったか?」

「は、はい。」

「それならよかった。」

そういいながらその人はほほ笑む。

「い、いえ、私は高校1年の桐間シャロといいます。助けていただきありがとうございます。ごさいます。」

「気にしないでくれ、私は高校2年の天々座(てでぜ)リゼだ。よろしくな。」

そこに園子がやってきた。

リゼと園子がお互いに事項紹介をし、リゼと別れる。

「テーリン先輩また今度。」

「ああ、また…ん? テーリン?」

また変なあだ名を：天々座先輩が怒ってないことが攻めての救いね。
少し歩くと園子が口を開く。

「キツシー、今日の特売はいつなの？」

「？、16時でけど…。」

「なら、車で迎えに行くからマッチも誘って一緒に行つていいかな？」

別に断る理由もないわね。

「いいわよ。」

・千夜・

「千夜、園子から電話だよ。」

甘兎庵で働いているとおばあちゃんが声をかけてくる。

「は～い。」

家に設置された電話の受話器をおばあちゃんから受ける。

でも、なんで家の電話にかけてきたのかしら。

「もしもし、園子ちゃん？どうかしたの？」

『16時にスーパでタイムセールがあるんやけど、車で迎えに来るから一緒に行かない？』

「16時？行きたいのはやまやまのだけど、その時間はまだ営業中なのを知っている

でしよう?」

『ふっふっふ、その辺はもうバーヤの許可を取ってるんよ。』

あ、先におばあちゃんに伝えるために家の受話器で電話してきたのね。

「それなら、行かせてもらおうわ。」

『了解なんよ。15時半までには家の前に迎えに行くね。』

「わかったわ。」

電話が切れた。

「千夜、それで行くのかい?」

仕事に戻ろうとしたらおばあちゃんに話しかけられる。

「ええ、行ってくるわ。」

「そうかい、なら15時には上がっていいからね。それから、玄関の近くにメモを置いて

おくから、買ってきておくれ。」

「任せて!!」

15時になり仕事を終え、買い物に行く用意もを割らせて外に出る。

「あ、千夜の用意は終わったのね。」

外にはもうシャロがおり、あとは園子待ちになった。

そして軽く話していると、奥からリムジンが現れる。

リムジンが前で止まり、一番後ろの窓が開く。

その開いた窓から、

「へい、お二人さん、乗ってかないかい？」

園子が顔を出す。

「はいはい、乗せてもらうわ。」

「そんな!?! シャロちゃんがナンパに応じるなんて!?!」

「ナンパじゃなくて、園子のいつものおふざけでしょ。」

む、反応がいまいちね。

チラッと園子を見ると一瞬目が合う。

「そんなく、キツシーの将来が心配なんよ。」

「元といえば園子の発言が問題なんでしょうが!!」

園子ものつかてくれるみたいだ。

「そんなく、キツシーが人のせいにするなんてく (棒)」

「シャロちゃん、最低よく (棒)」

「あ、あんたらねく (怒)」

やつぱり、シャロちゃんをからかうのは楽しいわ。

少し怒りかけているシャロに園子はまるでさつきまでのやり取りがなかったという

かのように、

「早くいかないと特売に送れるんよ。」

などと平然と言う。

「もともとあんたが原因でしょうが———
あたりにシャロの声が響くのだった。!!!!!!」